

【ポスター発表】

スクールソーシャルワークの雇用に関する一考察

—実務者へのインタビュー調査から—

○ 健康科学大学 渡邊 隆文 (009182)

[キーワード] ソーシャルワーク、ソーシャルワーカー、雇用

1. 研究目的

本研究ではスクールソーシャルワーカー活用事業初年度より継続して実施しているA県に焦点を当て、SSWerの雇用環境を支える構成要素を明らかにすることを目的とした。

2. 研究の視点および方法

A県のスクールソーシャルワーカー活用事業に従事している実務者11名のうち、同意の得られたSSWer8名を対象とした。調査は1名あたり60分程度の個別インタビューによる半構造化面接を実施し、調査対象者の承諾を得てICレコーダーで録音し、逐語録を作成した。インタビュー調査では、①現在の雇用について感じていること、②SSWとして働く理由、③継続して働くために必要なことの3点について尋ねた。なお、基本属性等の基礎項目等は質問紙調査にて回答を得た。

分析には、KHcoderを使用し形態素解析を行い抽出された語彙に対して、言語学的手法を用いてカテゴリの作成を行った。作成されたカテゴリ間の関係性について検討するため、コレスポンデンス分析を行い、分析結果を解釈した。

3. 倫理的配慮

倫理的配慮として、対象者に本調査の目的、匿名化の方法やデータ保管等について説明し同意書への記入を依頼した。また、健康科学大学研究倫理委員会の承諾を得た(承認番号第R1-025号)。なお、本発表に関連して、開示すべきCOIはない。

4. 研究結果

(1) 頻出語表示

インタビューの逐語録に対するテキストマイニング分析を用いたキーワード(語彙)の抽出を行った。分析対象がインタビューデータだったこともあり、形態素解析の結果抽出されたコンセプト(語彙)について、意味が通る様に強制抽出と不要語の設定を行った上で再度抽出を行った。結果、1,021件の分析単位に対する26,906の語彙が抽出された。抽出頻度の多かった語彙としては「時間」「思う」という語彙が多く抽出された。

表1 頻出語の抽出結果(上位15語)

時間(213)	思う(182)	SSWer(112)	言う(100)	人(92)
学校(79)	今(70)	働く(54)	本当に(54)	電話(42)
スクール(40)	事務所(39)	ソーシャルワーク(37)	必要(37)	持つ(36)

(2) コレスポンド分析の結果

コンセプト（語彙）間の関係性について検討するために、頻出語上位 50 語の中で品詞として意味がある語（名詞、サ変名詞、タグ）に対しコレスポンド分析を行った。「時間」「非常勤」「勤務」が集まって布置されており、これを「時間に限りがある非常勤としての勤務の在り方」と解釈した。次に、「学校」「SSWer」「カウンセラー」のグループは「学校という教育領域におけるSSWerとカウンセラーの協働」と解釈した。続いて、「事務所」「連絡」「電話」のグループは「事務所にいる時

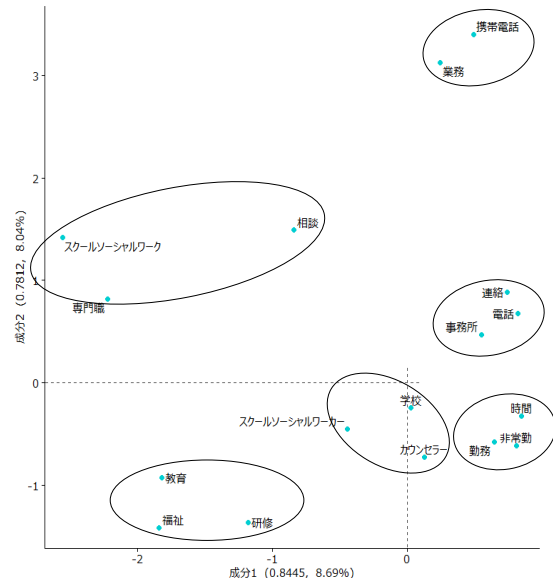


図1 コレスポンド分析結果

間が少ないことによる連絡手段や電話対応の困難」と解釈した。そして、「福祉」「教育」「研修」のグループは「福祉と教育の両側面からの研修の必要性」と解釈した。加えて、「スクールソーシャルワーク」「専門職」「相談」のグループは「スクールソーシャルワーク事業における専門職への相談体制の必要性」と解釈した。最後に「携帯電話」「業務」のグループは「携帯電話を活用した業務の在り方」と解釈した。

5. 考察

(1) 勤務の在り方

SSWer は年度末に勤務できない事業体系と限られた時間で実務に取り組んでいるため、シャドウワークが相当時間数見られる。加えて、SSWer のみで生計を立てることは極めて難しく人材の確保に課題がある。一方で、各事務所への複数配置については肯定的な発言が多くあり、採用時の時間数に柔軟性を持たせた運用が期待されており、今後勤務の在り方については更なる検討が求められていることが示唆された。

(2) 連絡手段の在り方

SSWer は、私物の携帯電話を利用している状況がある。これは、公私混同になってしまうリスクがある一方で、先方と連絡がスムーズに取れる有用性も挙げられている。今後、連絡手段の在り方について更なる検討の必要性が示唆された。

(3) 研修とSV等のサポートの在り方

SSWer は、福祉と教育の双方の視点から高度な専門性を求められる。しかし、現在は研修機会はあるもののスーパービジョンは個人の取り組みに委ねられている。今後、事業としての研修やスーパービジョンの機会拡充が示唆された。また、活用事業が導入されて10年以上が経過するもSSWerの実践は未だ十分な理解には及んでいない。学校教育現場で起こる問題は、SSWer が単身で対応するのではなく専門職が協働したチーム学校で行われることの関係機関への研修機会も期待されていることが示唆された。